

論文

『天経或問』の刊本と写本*

平岡隆二**

キーワード：東アジア科学、天文学、気象学、游藝、朱子学

1. はじめに

清の游藝（生没年未詳。17世紀活躍）が著した『天経或問』（康熙14・1675年序）は、方以智（1611-1671）を中心とする江南地方の学者サークルの影響下に成立した著作で、その後代への影響は、中国よりも日本において多大なものがあったことで知られる¹⁾。

しかし本書にまつわる研究の基礎とすべき同書の本文テキストが、どのように成立・流通し、かつどのように読まれたのかという問題については、中国・日本の双方においてなお解明すべき事柄が多く残されており、その実態を一次史料に基づいて実証的に把握する必要がある。本稿では、以上の問題意識から実施している現存刊本・写本調査に基づいて、本書のテキストがたどった歴史の変遷の諸相を明らかにするとともに、その本文復元のために採択すべき諸本と方針を示したい。

2. 『天経或問』について

『天経或問』という書物を一言で言い表すならば、天地とそこに生じるさまざまな事物・現象について、その基本的な構造や原理から、なぜそうなのか（「然る所以」）の説明までを、問答体の形で平易に解説した書物、とすることができる。『四庫全書総目提要』は、本書の概要を、

凡そ天地の象、日月星の行、薄蝕朧朧の故と、風雨雷電雨露霜霧虹霓の属と、皆設けて問答と為し、一一其の然る所以を推闡し、頗る明晰為り（巻106。原漢文）。

とまとめつつ、称賛している。

著者の游藝（字は子六、号は岱峯）の詳しい伝記は伝わらないが、福建省建陽崇化里の人で、北宋の程頤の高弟・游酢（1053-1123）の裔とされる²⁾。はじめ黄道周（1585-1646）に学び、またのちに熊明遇（1579-1649）や方以智（1611-1671）に天算の学や易理を学んだ。後者の2人は『天経或問』にも序を寄せており、とくに方以智は同書を「鑒定」している³⁾。游藝は本書の中でこの2人を師と称し（地37b、地6bなど⁴⁾、彼らの意見を多く引用している（天31a、地34aなど）。さ

* 受理日：2018年5月29日 採択日：2018年12月7日

** 京都大学人文科学研究所 E-mail: hiraokaryuji@hotmail.co.jp

らに游藝は、方以智門下の掲暄（生没年不明）とも親しく交わり、彼の『写天新語（璇璣遺述）』からの引用を本書に多く取り入れていた（図 8a、天 1b など）⁵⁾。以上のことは、本書が方以智サークルの大きな影響下に成立したことを物語っている。

本書において游藝が、アリストテレス的な宇宙像の大要を示したことはよく知られている⁶⁾。たとえば日月五星に固有の運動（右旋）は、「其れ各おの麗かる所の天に有り」（天 45b）とそれぞれの天の運動に帰され、さらにそれら七曜や恒星天の日周運動（左旋）は、その上位に位置する宗動天の運動によるとされる（天 46b）。これは明らかに、利瑪竇（Matteo Ricci, 1552-1611）らが中国に紹介した西洋の同心天球の宇宙構造論に基づくものである。また本書は明確な地球説の立場をとるが（天 4a-5b）、収録される計 22 の図版の 1 つ「隨地天頂子午之図」（図 12a）でも、イエズス会士・陽瑪諾（Manuel Dias Jr, 1574-1659）の『天問略』から図と解説を引いて地球説について解説している。これ以外にも游藝は、李之藻『渾蓋通憲図説』や湯若望『新法曆引』などを頻繁に引用しながら論述を進めており（天 5b-10a など）、これらの漢訳西洋天文書を幅広く渉猟し、利用していた（ただし引用であることを明示しない場合も多い）。

しかし吉田忠が指摘したように、本書の根底には中国の自然哲学、とくに宋学以来の気の哲学があるのであり、西学もこれによって受け止められていたことは強調しておかねばならない⁷⁾。たとえば地球説について論じたところでは、もし球形の大地が天の中央に掛かっているならば、どうして空中に浮かんだまま落ちないでいられるのか、という問いかけに対して、

曰く、天地渾圓として、本と相い聯属す。古人の云く、一尺の地を減らせば則ち一尺の天を多くすと。然らば地も亦た天なり。其の形を以てこれを言いてこれを地と謂う（天 4a）。

と応答する。ここで游藝は、『朱子語類』や掲暄『写天新語（璇璣遺述）』の一節⁸⁾を踏まえつつ、地もまた天であると論じており、その違いはかたちを有するか否かに過ぎないと断言する。そしてなぜ地球が落ちないでいられるかという点、

天はそれを裏著す。運旋の気は升降して息まず、四面緊塞して展側するを容さず。[中略] 然して総て方隅無し。四面都て是れ上、墜つべき処無し。天の至中に適す。亦た倚るべき処無し（天 4a）⁹⁾。

すなわち、天地の間には運旋する気が絶え間なく昇降して、地球の四面をすき間なく塞ぎ、そのためころがることはできないとするのである。

ここにはアリストテレス流の天地の二分法や、エーテル・四元素の自然な場所・運動といった理論の根幹をなす概念はまったく見いだされず、その役割を占めるのは運旋する「気」のみである。掲暄は本書に寄せた序の中で「游子の書は一気之を運ずるのみ」（序 9b）と述べるが、同様の思想的傾向は、掲暄『写天新語（璇璣遺述）』や熊明遇『格致草』にも見出すことができ、彼らのサークルに共通する思想的態度であった¹⁰⁾。言うなれば彼らは、アリストテレス自然哲学を、気の哲学によって中国化しつつ理解・把握していたのであって、西洋的な理論枠組みのまま受容・紹介していたわけでは決してなかった¹¹⁾。本書はこれまで「西洋流天文書」と呼ばれることもあったが¹²⁾、上のような基本的性格の書物であることは強調しておかねばならない。同じころ中西数理科学の全面的な統合に取り組んでいた梅文鼎（1633-1721）は、本書と『写天新語（璇璣遺述）』について、

天経新語各爲工 天経 [或問]・[写天] 新語、各おの工を爲す

今古諸家黜会通 今古の諸家、会通すること黜し¹³⁾

と高く評価したが、これも本書のそうした性格と無関係ではあるまい。以上のことは、『天経或問』という書物が後代の読者にどのように読まれたかを考えるうえでも重要なポイントと思われるので、とくに指摘しておく。

3. 現存する刊本と写本

3-1. 清刊本（大集堂版）

『天経或問』の清刊本は、日本以外では現存が確認されておらず、東京の国立公文書館内閣文庫蔵本の1本が知られるばかりである。以下この版を、封面に見える書肆名を採って大集堂版と呼ぶ¹⁴⁾。

大集堂版は今のところ『天経或問』の原刻本と認め得る唯一のテキストで¹⁵⁾、その本文研究の基礎史料とすべきものであることは言を俟たない。蔵書印「昌平坂学問所」の存在から、かつて江戸幕府の昌平坂学問所（湯島聖堂）の旧蔵だったことが分かるが、おそらく大成殿に宝蔵されていた¹⁶⁾ということ以外、その渡来・架蔵の時期や由来等は不明である。ただし『天経或問』の清刊本は、この大集堂版だけでなく、それとは内容を異にする別版が存在したようで、そちらも近世日本に渡来していた。それについては次節で詳しくみてゆく。

3-2. 現存写本

これまで調査し得た『天経或問』の写本は、中国で成立した写本4点と、日本で成立した写本13点の計17点である。表1にその概略をまとめた。

3-2-1. 中国で成立した写本

表1に掲げた写本のうち、[02]四庫本、[03]静嘉本についてはすでに紹介されており¹⁷⁾、また[04]上海本は四庫全書本の転写本であるため省略に付し、ここではとくに[01]科学史所本について詳しくみてゆく。

科学史所本は、上に見た大集堂版と同じ封面を持つなど¹⁸⁾、刊写本の特徴を有している。しかし大集堂版にない独自の特徴として、(1)巻頭に張昌亮の序文（康熙14・1675年にあたる年が明記されている）を有する¹⁹⁾、(2)「古今天学家」と題する項目に計252人の名前を掲げており、この数は大集堂版の同項目が掲げる157人のほぼ倍に近い、(3)図版が大集堂版より1点少ない計21点（「禹書経天合地図」を欠く）で、解説テキストにも若干の異同が見られる、の大きく3点を挙げることができる。これらの特徴を併せ持つテキストは、現在のところこの科学史所本のみである。

ここで注目したいのが、久留米藩儒・入江脩敬（1699-1773）がかつて目にしたという2種の清刊本にまつわる記述である。結論を先取りするならば、入江が目にした2種とは、1つは大集堂版で、もう1つはこの科学史所本の原刊本と推定される「もう1つの清刊本」だったと思われる。入江の証言は、彼が寛延3年（1750）に刊行した『天経或問註解』の凡例に見えており、それを上の(1)~(3)に該当する箇所を示しつつ引用すると、以下のとおりである。

表1. 写本一覧

番号・略称	所蔵機関	請求番号	巻・冊	旧蔵者	成立年等	每半葉行・字数	張昌亮序	刷回数	備考
中国で成立した写本								刷回数15葉	
[01] 科学史所本	中国科学院自然科学史研究所 図書館	善子521-577	不分巻・一冊		清	9行24字	○		
[02] 四庫本(文淵閣本)	台湾商務印書館影印本による		四巻		乾隆47年(1782)	-	×		
[03] 静嘉本	静嘉堂文庫(日本)	11-25	不分巻・一冊	陸心源	清・道光年間	10-12行25-28字内外	○		
[04] 上海本	上海図書館	線普348211-14	四巻・四冊	盧江劉氏遠碧樓	民国	10行21字	×		副匡郭(藍格)遠碧樓劉氏寫本
日本で成立した写本									
[05] 平山本	東北大学附属図書館平山文庫	MA438	不分巻・一冊		元禄7年(1694)奥書。昭和40年(1965)兒玉興書	9行24字	×		大集堂版の写本
[06] 林甲本	東北大学附属図書館林文庫	2770	上(下)巻・一冊	(書肆)林義端	元禄10年(1697)奥書	9行24字	×	○	副匡郭・版心「天経或問」
[07] 林乙本	東北大学附属図書館林文庫	2769	上(下)巻・二冊	圓鏡	1700年頃	9行24字(張昌亮序のみ8行18字)	○	○	識語「康熙十四年乙卯、日本延宝三年」
[08] 羽間本	大阪歴史博物館羽間文庫	101-32	上(下)巻・二冊	(醫師)飛鳥喜内	1700年頃	9行24字	×	○	
[09] 京大本	京都大学附属図書館	6-04ヲ4	上(下)巻・二冊	(貸本屋)大野屋惣八	1700年頃	11行23字	×	○	
[10] 秋岡本	神戸市立博物館秋岡コレクション	天文暦学45	不分巻・三冊	(僧)峯充	元文5年(1740)奥書	10行20字	×		沼田敬忠による2種の識語を付す
[11] 松浦本	松浦史料博物館	甲89-314	不分巻・一冊	(平戸藩主)松浦静山	江戸時代	12行23-24字	×		特装本
[12] 内閣本	国立公文書館内閣文庫	305-209	(上)下巻・二冊		江戸時代	9行18字	×		
[13] 海野本	国際日本文化研究センター海野文庫	MB/27/Yu	上(下)巻・二冊(合一冊)		江戸時代	9行24字	×		
[14] 京大文本	京都大学大学院文学研究科図書館	文・地理K6-25	上(下)巻・二冊		延享2年(1745)奥書	11行23-30字内外	×		
[15] 狩野本	東北大学附属図書館狩野文庫	8.21381.1	上・地巻・一冊	駒込西教寺	享和2年(1802)識語	9行24字	×		
[16] 平岡甲本	著者蔵	-	(上)下巻・二冊	小笠原家	江戸時代	11行24字	×		
[17] 平岡乙本	著者蔵	-	不分巻・一冊	空淵(僧か)	江戸時代	10行20字	○		和刻本の写本
参考	大集堂版(清刊本)		不分巻・一冊	昌平坂学問所	康熙14年(1675)頃	9行24字	×		
参考	松葉軒版(和刻本)	特7325	四巻・四冊(含附録)		享保15年(1730)	10行20字	○		

天経或問の旧本に二刊有り。予が往歳見る所の者は其の序六篇、倭刊の本と同じくして、而も(2)古今天学家の名数殆ど之に倍し、且つ図巻の初めに天経或問首巻の六字を題す。(3)図象・字体も亦往往にして同じからざる者有り。近来、郡上侯の蔵本を借覧す。予が此の刻、憑りて以て考訂す。然るに彼の本、(1)張昌亮が首序を闕き、且つ図の初めに題する六字無し。而して古今天学家の名数、全く倭本に同じ。茲に因りて之を觀れば、則ち倭本の旧本に於けるや、大同小異にして、而も二刊に出入す。其れ孰れの本に適從するか、予未だ抛る所を審らかにせず²⁰⁾。(原漢文)

入江が目にした「旧本」の「二刊」（すなわち2種の清刊本）のうち、後者の「郡上侯の蔵本」は大集堂版と同版とみてよいが²¹⁾、それとは明らかに異なる前者のテキストが、上に見た科学史所本の特徴と著しく類似することは明らかである。以上から入江の見た「もう1つの清刊本」は、科学史所本の原刊本と推定することができ、同写本はすでに失われたそのテキストを復元するための基礎史料と言える。

なおこの異版が確かに日本に渡来していたことは、上の入江の証言を待つまでもなく、日本で刊行された和刻本が張昌亮序を有することから明らかであり、その原型の復元には、そちらも併せて参照する必要がある。この問題については、次節以降で詳しく論じたい。

3-2-2. 日本で成立した写本

本書がとくに熱心に求められ、研究されたのは、中国ではなく日本であった。今回日本に現存する写本を検討したところ、本書は享保15年(1730)に和刻本が刊行される以前から、すでに上方を中心に幅広く書写・研究されていたことが明らかとなった。

京都の儒者・中村惕斎(1629-1702)によると、同書の日本への輸入を許可したのは、長崎聖堂祭酒の南部草寿(1637-1688)で、それは延宝4~7年(1676-1679)のことだった²²⁾。草寿は長崎の天学家・小林謙貞(1601-1683)の莫逆の友として知られ、互いに多くいた弟子も、謙貞・草寿の双方から学ぶことを常としたという²³⁾。謙貞が同書の舶載について草寿から何も知らされなかったとは考え難く、あるいは謙貞自らがその輸入許可に関わっていた可能性すら考えられる。

続いて本書にまつわる最初期の記録を残したのが貝原益軒(1630-1714)で、その読書目録『玩古目録』の貞享2年(1685)の条に「天経或問 三冊」²⁴⁾と見える。すなわち益軒が目にしたのは、同書の三冊本だったようである。なおその2年後の貞享4年には本書の続編にあたる『天経或問後集』(康熙20・1681年頃成立)が渡来するも、禁書とされ一部墨消のうえ差し返しとなっている²⁵⁾。

日本で成立した写本の中でも重要なのが[05]平山本である²⁶⁾。その大尾には「岩元禄七甲戌[1694]仲秋望日」という奥書が付され、これは日中に現存する写本の中で最も古い。その巻頭に大集堂版と同じ封面の写しを付すが、これは昭和期に内閣文庫蔵の大集堂版から補記したもので、近世期のものではないことには注意を要する(本写本に付された児玉明人の奥書による)。しかし児玉がその奥書で述べるように、この写本は柱・丁付けのみならず、本文の字体まで大集堂版と酷似するため、元禄7年以前に渡来した同系統の清刊本を忠実に模写したものとみて間違いない。しかも内閣文庫蔵の大集堂版は、とくに巻初・巻末の数葉や図版の一部に著しい欠損があるため、その欠を補うためにも、本写本の存在は貴重である。

続いて注目すべきは、[06]~[09]の4写本の本文中に、印刷図版が計15丁挿入されていることである(図1、図2参照)。しかもそれを大集堂版の対応する15葉(版心番号、図乙~図十五)と比較してみると、図やテキストのディテールから匡郭の寸法(郭内縦19.0×横11.0cm内外)にいたるまで、ほとんど同一といってよいほど酷似する。



図1. [06] 林甲本の印刷図版 (左葉が1丁表。右葉は写本)

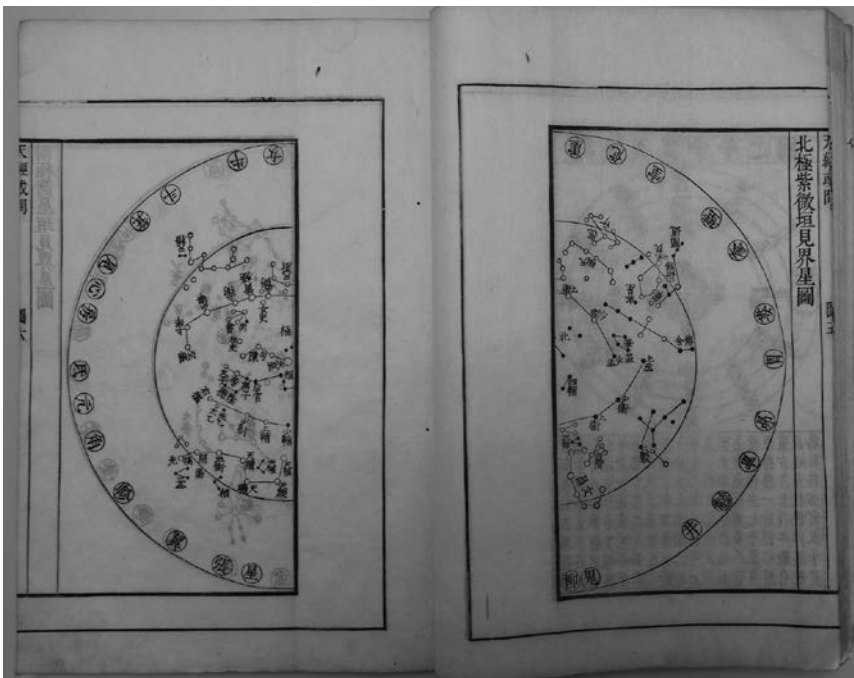


図2. [08] 羽間本の印刷図版 (5丁裏-6丁表)

手書きの写本中に突然現れるこの印刷図版は、一見した限り大集堂版のそれとまったく区別がつかないが、4写本とも明らかに同一版で、かつ日本で新たに彫り起こした版によるもの判断される。なぜならその版面には、大集堂版と唯一異なる点として、本文匡郭の外側をさらに一回り大きく取り囲む四周単辺の匡郭（郭内縦 22.0 × 見開き横 30.8cm）が追加されるが、これは日本の職人が、日本の版型である「大本（美濃本）」として印刷・装訂するため追加したものに違いないからである。具体的には、おそらく覆せ彫り等の技法で清版の忠実な複製版を製作したと考えられるが、その結果、本のノドの左右に大きな余白ができてしまうことになり、たとえば図2のような見開きの星図はたいへん見にくいものとなっている。この不自然な余白は、そうした覆刻版を製作したものの、それを中国に比べて横長の日本の判型に合わせて印刷・装訂したことで、必然的に生じてしまったと考えざるを得ない。実際この15丁の料紙は4写本とも日本の楮紙（美濃版）に刷られており、版木の製作地のみならず、印刷地も日本であったとみて間違いなまいだろう。

それでは、いったいいつ、誰が、どのような理由でそのような版木を作成したのだろうか？ まず成立年については、この印刷図版を収録する[06]林甲本が、元禄10年（1697）の成立と確定されることから（後述）、少なくともそれ以前に開版されていたことは間違いない。またその開版の理由は、本書の写本制作にあたって、図版を書写する労力を省くだけでなく、手で書くよりはるかに正確で美しい図を備えることにあった、と考えるのが自然だろう。写本制作時に問題となるのが図版の書写で、それには筆才だけでなく絵心も必要なことから、図版だけ転写せずに省略することも多かった²⁷⁾。本書の写本を熱心にもとめる人にとって、その図版を最小の労力と最大の正確さで入手できるこうした印刷物は、きわめて魅力的なものであったにちがいない。

しかし以上が認められるとしても、写本に挿入する図版だけを版に起こすくらいなら、なぜ全編を和刻本として刊行しなかったのか、という疑問が残されるかもしれない。この問いを考えるにあたって、第一に想起すべきは、貞享2年（1685）に厳重化した禁書令²⁸⁾により、在華宣教師の名や著作からの引用を多く含む本書の和刻本出版がはばかれた可能性である。実際貞享4年には本書の続編にあたる『天経或問後集』が禁書に指定されているし、また西川正休（1693-1756）による和刻本刊行が実現したのは、徳川吉宗による享保5年（1720）の禁書令緩和からしばらくたった享保15年のことだった。以上の状況を考え合わせると、この可能性を軽視することはできない。

しかし指摘しておかなければならないのは、江戸時代の日本では、刊本だけではなく、写本も書物文化全体のなかで重要な位置を占めており、写本を作る専門の本屋や販売ルートまで存在していたことである²⁹⁾。しかも刊本とちがって、写本はほとんど検閲の対象にならず、需要さえあれば発禁本でさえ写本がつくられ、流通していた³⁰⁾。すなわち1700年頃の日本で、写本と刊本のハイブリッドのような『天経或問』テキストが成立したことの背景には、和刻本の刊行をはばからせる禁書令の存在だけでなく、写本であれば禁書ですらかなり自由に所持することが可能で、場合によっては販売・流通させることさえできたという側面の、両面から考えなければならない。

またこの印刷図版を元禄10年（1697）以前に開版したのは、一体どこの誰だったかについて考えるならば、それはおそらく京都を中心とする上方の知識人サークルに属す誰かで、本書の写本を求める特定の層に向けて配布あるいは販売するために作成したと推定するのが妥当であろう。この問題を考えるにあたってとりわけ重要なのが、[06]林甲本に付された奥書である。すなわち、

右天経或問は、往歳江田文蔵の写本を借り、老子嶋順安をして謄写せしむところなり。爾後又伊藤東涯子の唐本を備え、手づから親しく朱を以て其の圈点・句読を写し、且つ文字・脱誤を訂して自ら珍蔵す。偶たま深田昌叱〔正室〕儒師之を聞き、〔伊藤〕固庵先生を介して借を請う。而して其の家本を校正するの余暇、復た考訂す。此の本小片紙の朱書、是れなり。是に於て魯

魚鳥焉の疑い絶えたり。実に証とするに足れりと云。元禄丁丑 [10年] 十月五日、文会堂主人謹識。(原漢文)

この奥書を記した「文会堂主人」は、伊藤仁斎 (1627-1705) 門下の京都の書肆・林九兵衛義端 (号、文会堂。?-1711) のことである³¹⁾。ここで林が述べる、この写本の成立に関わった人物は計5人におよび、その内少なくとも江田文蔵なる人物と、尾張藩儒の深田明峯 (正室。1639-1707) の2人が『天経或問』の写本を、また伊藤東涯 (1670-1736) が清刊本を所持していたこと、さらに本写本に付された朱の圈点・句読は東涯本に基づくもので、小片紙の朱書は深田明峯による考訂の写しであることが判明する。この元禄10年 (1697) の時点で、すでに彼らのサークルの間で『天経或問』の写本や刊本の情報だけでなく、本文研究の成果まで広く共有されていたことがうかがえる。

ちなみに本写本は、印刷図版以外の本文にも、四周単辺の匡郭を印刷した料紙を用いるが、その版心に「天経或問」という柱題まで刷り込むことから、これはまさに本書の写本を作るためだけに開版したものである (図1の右葉参照)。これは唐本好きが高じて両替屋から書肆に転身した林が作成し、江田蔵本の書写を依頼した嶋順安なる人物に提供したものである可能性が高い。さらにその匡郭の寸法 (郭内縦 21.6 × 見開き横 30.8cm) は、印刷図版の外側の匡郭寸法 (郭内縦 22.0 × 見開き横 30.8cm) とよく一致している。以上のことは、これらの印刷図版を開版したのも林本人であったか、あるいはすくなくとも彼の周囲にいた京都の本屋だった可能性を示唆している。

続いて注目したいのが、[10]秋岡本の巻頭に付された、測量家・天文家の沼田長敬忠 (号、操軒。生没年不明) による2種の識語である³²⁾。この写本は奥書から元文5年 (1740) に峯充なる僧が書写したものと分かるが、その転写元となったのは享保期に沼田が書写した写本であったことが、これらの識語から判明する。その一つは享保7年 (1722) に書かれた「題天経或問」と題するもので、もう一つは享保10年 (1725) に追補された無題の識語である。とくに後者は、本稿の議論と深く関係する内容を含むので、長文ではあるが以下に全文を引用する。

予嘗て南都に在りしとき、森原泉子と講学情密なり。一日天文を論じ、話天経或問に及ぶ。予曰く、此の書先儒未だ発せざる所のものを発すこと多しと聞く。之を閲るを冀いて而して未だ得ずと。後、豫州新谷に遊官す。享 [保] 辛丑 [6・1721] 歳、原泉子彼の書を謄写し、南都より貽示す。原 [厚カ] 情感幸に勝る。始めて之を閲るを得るに、固より啓発する所多し。然れども間ま難読難解の処有り。疑らくは誤字脱文有らん。且つ原泉子、図画を善しとせず。故に巻首の図を闕く。亦た遺恨無きあたわず。其の明年 [享保7・1722] 春、大洲に加藤君の侍医村上見順を訪ぬ。談適たま彼の書に及ぶ。順曰く、我が家亦た此の書を蔵すと。因って請いて携え帰り、校考するに誤字を正し脱文を補うを以てす。且つ巻首闕く所の図を補写す。完全に復するを得たるに似たるを甚だ喜ぶ。其の年、原泉子、印行の図本及び彼の原本を尺 [借カ] 来す。曰く、先に遣る所の本、図を闕く。幸にして刊行の図本有り。故に之を貽る。其の原本の若きは則ち參校訂鑿に供せよと。故に更に復た校訂するを得。而して其の図印本、甚だ美なり。遂に印本の図を留め、以て闕く所の図を補足すく嘗て村上氏蔵本を以て謄写する所の図、亦た之を棄去するに忍ばず。亦た別巻と為して以て本書に附して共に三巻とす。而して其の原本を還す。是に於て愈いよ完本を為すに似たるなり。其の明年 [享保8・1723] 新谷を辞して故里に帰る。去年 [享保9・1724] 南都に遊び、原泉子の宅に留ること数旬。旧友小倉保孝來訪し、談話亦た此の書に及ぶ。曰く、保孝亦た原泉子写す所の原本を以て一本を謄写す。後に他本を得、以て校正す。子、携へ帰り又た更に校鑿せんと。予悦んで其の意に應ずるなり。今年 [享保10・1725] 春、高砂木村氏の館に來留す。講書の暇、更に參校訂補すく小倉氏の本、

圈点有り。蓋し明〔ママ〕に刊する所の本、此の点有るなり。故に今朱画を以て之に補加すと云う。且つ小倉氏の本、亦た誤脱有り。則ち補正を就すが為に、亦た少しく我の疑う所、発する所を書標に記し、以て還納す。而る後、此の書完全に復すを得て遺恨無きに似たり。因て其の歴田〔由カ〕を識すと云う。享保乙巳〔10・1725〕暮春中浣 操軒沼田敬忠識。（原漢文。下線筆者）

ここで沼田が述べる、彼の写本の成立に関わった人物は計3人（森原泉子³³なる南都すなわち奈良の人、大洲藩医・村上見順、小倉保孝なる人物）で、彼らは皆『天経或問』の写本を所持していた。そのうちの1人（原泉子）は、自らの写本を沼田に提供するだけでなく、その転写元の「原本」まで後日探し求めて沼田に提供している（すなわち沼田が検討し得た写本は計4本あった）。また別の1人（小倉）は、他本との校正など独自の本文研究も行っていた。

とりわけ重要なのは、原泉子が沼田に見せたという「印（刊）行の図本」の存在である（上記引用の下線部参照）。この享保7年（1722）の時点で和刻本はまだ刊行されておらず、これはすでに見たような、日本で新たに版に起こした印刷図版のことを指すに違いない。沼田がその図版を評して「其の図印本、甚だ美なり」と述べることから、この時なお清版に邂逅し得なかった彼の喜びと興奮が伝わってくるようである。

これまで和刻本刊行以前に本書を利用した日本の学者は、渋川春海（1639-1715）以外はほとんど注目されておらず、その利用もあたかも偶然かつ突発的な印象を与えるものだった。しかし上に見た写本に残される情報は、本書が1700年前後の日本でとくに熱心に求められ、さかんに研究された中国天文書であったことを如実に物語っている。これらの写本の存在は、そうした通史の見方への再検討を要請するだけでなく、渋川春海による利用の背景に、こうした知識人相互のネットワークがあったことを強く示唆している。

3-3. 和刻本（松葉軒版）

『天経或問』の和刻本は、西川正休の訓点により享保15年（1730）に江戸の書肆・松葉軒萬屋清兵衛から刊行された。この和刻本には、異なる奥付を持つ本が計4種存在することがすでに指摘されており、それらはいずれも同一版と見なされている³⁴。今回実施した調査により、先行研究では未知の奥付を付すものが新たに4種確認されたので、それらを含めた版の異同や、印行の先後関係を確定する必要がある。この問題を考えるために、日本・中国・韓国に現存する67点の和刻本を、その推定印刷年代順にA～Hの計8群に整理・分類してまとめたものが表2である³⁵。

第一に指摘すべきは、表2に掲げた和刻本は、すべて同一の版木から印刷されたと判断されることである。そのことは、これらの諸本がすべて版木下に「松葉軒」という版元名を持つことから推測できるが（もし覆せ彫り等によって新たに版に起こした場合、過去の版元名を残すことは考えにくい）、もっとも重要な証拠が、表2の⑥に掲げた、匡郭の欠損箇所が存在である。互いによく似た版面を持つ刊本が、同版か異版かを判定する際に有効な方法として、匡郭の切れ目を比較する方法がある³⁶。近世日本の整版印刷では、版木自体に生じた欠損が、そのまま版面に切れ目となって表れるので、同じ個所に同じ切れ目があればそれは同版であり、同版であれば切れ目の多いものほど後印本ということになる。なぜならその欠損が文字に及ぶものであれば、「入れ木」等の技法で補修されるのに対して、本文の読みと直接関係のない匡郭の欠損は、修補されずそのまま放置される場合が多いからである³⁷。この原則にのっとして、諸本に見られる特徴的な匡郭欠損を抽出・比較し、その欠損状態を調べたものが表2の⑥である。

まずA群の刊本は、見返しと奥付から、松葉軒万屋清兵衛が享保15年（1730）に刊行したもので、

表 2. 和刻本分類一覧

	A群 江戸松葉軒刊	B群 江戸若菜屋印	C群 江戸嵩山房印	D群 大坂賭春堂・崇高堂 印	E群 大坂賭春堂・文金堂 印	F群 四都甲印	G群 四都乙印	H群 四都丙印 (明治印)
①該当する版本	都立A本、上海本など (計8点) [松葉軒壽櫻]	峰A本、中国国図本など (計13点) [壽櫻]	林集B本、ソウル本など (計20点) [嵩山房粹]	桑木E本、天文台C本など (計21点) [賭春堂・崇高堂]	平岡A本、桑木F本 (計2点) -	平岡E本 (計1点) -	林C本 (計1点) [賭春堂・崇高堂]	秋岡B本 (計1点) [賭春堂・崇高堂]
②見返しの堂号								
③柱下	松葉軒	松葉軒	松葉軒	松葉軒	松葉軒	松葉軒	松葉軒	松葉軒
④奥付 (年紀、都市名、版元名)	享保15年 (1730) 11月、江戸日本橋、松葉軒萬屋清兵衛	享保15年 (1730) 11月、江戸日本橋、若菜屋小兵衛	享保15年 (1730) 11月、江戸、嵩山房小林 (須原屋) 新兵衛 ※別版の奥付 (広告8月校訂、大坂心齋橋通、口又一・崇高堂泉本 (河内屋) 八兵衛 ※入江註解の奥付を付すものもある)	天経或問註解、享保15年 (1730) 11月、寛政6年 (1794) 8月校訂、大坂心齋橋通、賭春堂山口文一・文金堂森本 (河内屋) 太助	天経或問註解、享保15年 (1730) 11月、寛政6年 (1794) 8月校訂、大坂心齋橋通、賭春堂山口文一・文金堂森本 (河内屋) 太助	(年紀なし)、江戸・名古屋・京都、大阪、須原屋茂兵衛・河内屋太助・河内屋仁助など計12人	(年紀なし)、江戸・京都、名古屋、大阪、須原屋茂兵衛・河内屋喜兵衛など計12人	(年紀なし)、京都・東京、名古屋、大阪、吉野屋仁兵衛・河内屋喜兵衛など計13人
⑤広告				賭春堂、崇高堂、文金堂など	文金堂			
⑥匡郭の欠損								
天部1表		○	○	○	○	○	○	○
地部15裏・大略36裏			○	○	○	○	○	○
天部51裏・合刻序5表				○	○	○	○	○
⑦推定印刷年	1730～18C中頃	18C中頃	18C中～後頃	18C後～19C前頃	18C後～19C前頃	19C前～中頃	19C前～中頃	19C中～後頃

前述の版心下「松葉軒」の存在と合わせて、この群が原刊本（初印本）と確定できる。そしてこれを基準に、それ以外の奥付を持つ他群の匡郭欠損箇所を複数調べたところ、その欠損はA群から順に、B群、C群へと蓄積される一方で、その逆は見られず、また明治以降に印刷されたH群の刊本がそのすべてを継承することが確認された。このことは、これらの諸本が享保期の初印本から明治期の後印本にいたるまで、すべて同一の版木から印刷され続けていたことを裏付けている。したがって本稿ではこれらの和刻本を総称して松葉軒版と呼ぶことにする。

続いて松葉軒版の版木あるいは板株（版權）を継承した歴代の版元がどのような人物・本屋だったかについて、判明した範囲で解説を加える³⁸⁾。

【A群：江戸松葉軒刊】

松葉軒萬屋清兵衛は、江戸日本橋の書肆で、本姓は松葉氏、また天和堂とも称した。奥付の文言は以下の通り。

享保十五年
 庚戌十一月
 日本橋通一丁目
 江府書林松葉軒 萬屋清兵衛鑄

松葉軒が印行したA群の諸本は、多くが茶色・無紋・厚手の表紙を用いている。天文関係では、他に春日経高編『暦林要略』享保17年（1732）刊を刊行している。

【B群：江戸若菜屋印】

松葉軒と同じ江戸日本橋の書肆、若菜屋小兵衛の印行にかかる。見返し・奥付は、A群の版の書肆名を削除・改修して用いている。なお入江脩敬『天経或問註解』の寛延3年（1750）刊本は、この若菜屋からの刊行である³⁹⁾。すなわち若菜屋は、その新刊の註解本を、松葉軒から求版した和刻本と合わせて売り出したようだ。さらに若菜屋の奥付を持つ入江註解の巻末には、「〈古今天学家伝 一冊／本経註解 六冊〉追刻」と双行に記した追刊予告も刷りこまれている⁴⁰⁾。この二書はおそらく『天経或問』収録の「古今天学家」にまつわるものと、本論（天・地巻）の註解本をそれぞれ指すものだろう。いずれも未刊に終わったようだが⁴¹⁾、若菜屋がさらに別の『天経或問』関係書の刊行も視野に入れていたことは、それだけの需要を見込んでいたことのあらわれでもあり、注目に値する。

【C群：江戸嵩山房印】

同じく日本橋の書肆、嵩山房小林（須原屋）新兵衛が印行したもの。見返し・奥付はB群の版の書肆名のみを改修して用いる。表紙には薄茶色・無紋・薄手を多く用いる。若菜屋が所蔵した『天経或問』の版木は、入江註解の版木とともに、この嵩山房がまとめて求版したようだ。なぜなら、嵩山房も入江註解刊本を印行しており、かつその奥付は若菜屋のそれと同版で、書肆名のみ「嵩山房／小林新兵衛求版」と改修しているからである⁴²⁾。嵩山房が刊行・販売した他の天文書に、西村遠里『天学指要』安永7年（1778）刊⁴³⁾、高井晒我『訓蒙天地弁』寛政4年（1792）がある。

【D 群：大坂賭春堂・崇高堂印】

松葉軒版の版木は、18世紀後半頃に、入江註解の版木とともに東海道を上り、大坂心齋橋の書肆、賭春堂山口又一と崇高堂泉本（河内屋）八兵衛の相合版（版權の共同所有）となった。見返しはC群の版の書肆名のみを改修して用いる。新たに付された奥付は、

天経或問注解〔ママ〕〈全部三冊〔ママ〕／発行〉

享保十五庚戌年十一月刻

寛政六甲寅年〔1794〕八月校訂

大阪書房 〈心齋橋通北久太郎町 山口又一／同通南久寶寺町 泉本八兵衛〉

と記している。当時の大坂の本屋仲間記録『板木総目録株帳一』（寛政二年改正）にも、「天経或問四〔巻〕」および「同〔入江〕註解 三〔巻〕」の版株が、「相 河八・山又〔以下別筆で〕河太」すなわち河内屋八兵衛と山口又一との相合株だったことが明記されている⁴⁴⁾。最後の「河太」は、E群の奥付に名に見える文金堂森本（河内屋）太助のことで、後に版株の一部が彼に移ったことを意味している。

上に引用した奥付に「注解」「三冊」と見えるのは、明らかに入江註解との混同であるが、これまで確認したこの奥付を持つ刊本はすべて松葉軒版で、また彼らが4冊まとめて印行していたことも間違いない（4冊を完備する刊本は桑木E本、京大文B本など計11点確認済み）。さらにこのD群の中には、上の奥付ではなく、入江註解の方の奥付を綴じ込んだ刊本まで存在している（学士院D本、林集C本、羽間B本）。以上を考え合わせると、上に引用した奥付文言の齟齬は、単なる入江註解との混同というよりは、おそらくこの二書を別個の著作ではなくセットで取り扱うべき商品と考えた書肆側の認識を反映したもので、実際そのように売り出したのだろう。

また上の奥付は、寛政6年に本書を「校訂」したとも記すが、これ以前の印本と版面を比較してみても、大きな違いは見いだされなかった。したがってこれは、版面に何の痕跡も残さぬほど見事な校訂（補修）を施したか、あるいはことさらに校訂を強調する書肆のさかしらのいずれかと思われるが、近世期を通じて比較的良好な状態を保ったとみられる松葉軒版の版木において、ほとんど唯一の本文テキスト欠損箇所（合刻序5b、6行目の「…己性同…」の3字）が、このD群の印本でも補修されていないことを見ると、後者の可能性が高そうである。

なお前掲『板木総目録株帳一』によると、この両書肆がこの時期版株を有した他の天文書に「天象列次図 一枚摺」および「平天儀 一枚／同 図解 一」があった⁴⁵⁾。前者はおそらく渋川春海『天象列次之図』寛文10年（1670）刊を指し、また後者は岩橋善兵衛の「平天儀」および『平天儀図解』享和2年（1802）のことである。

【E 群：大坂賭春堂・文金堂印】

この群は、上のD群の崇高堂の版株が、文金堂森本（河内屋）太助へと移り、新たに賭春堂・文金堂の相合版として印行されたものと思しい⁴⁶⁾。奥付はD群の版の書肆名のみ改修して用いる。この群で見返しを有する刊本はなお確認できない。

この文金堂河内屋太助は、文化頃に多くの天文書の版株を有したことが、前掲の『板木総目録株帳』等の史料から分かる。それらを列挙すると以下のとおり（相合株を含む）⁴⁷⁾：渋川春海『天象列次之図』；岩橋善兵衛「平天儀」および『平天儀図解』；西村遠里『天学指要』；西川如見『天文義論』；同『怪異弁断』；同『天文教導和歌注』。文金堂は、自ら開版もしたが、それ以上に京都や江戸の版木を集めて、たくさん売り上げた本屋として知られる⁴⁸⁾。松葉軒版や入江註解も、彼の

そうした販売戦略にのっとって収集されたのかもしれない。

【F群：四都甲印】

この群の刊本は、現在のところ1本のみ（平岡E本）である。その奥付は、「三都 発行 書肆」と題するものの、実際は江戸・京都・大阪に尾州（名古屋）も含めた四都の計12書肆を列挙するため、ここでは「四都甲印」と名付けた⁴⁹⁾。ただしこれらのすべてが版株を有したとは限らず、一部は単なる売り捌きだけだったかもしれない⁵⁰⁾。

【G群：四都乙印】

この群は、奥付の連名がF群と同じ計12書肆であるが、3人の名が消え、新たに3人が追加される。とくに末尾に名に見える河内屋喜兵衛（柳原氏。堂号は積玉園）は、当時大阪でもっとも勢力のあった河内屋一統の総本家である。

【H群：四都丙印（明治印）】

これまで確認し得た最後の後印本である。奥付にはG群より1人多い計13書肆が列挙されるが（2名が消え、3名が追加）、それまで「江戸」と記されてきた書肆の住所が「東京」と改められていることから、明治以降に印行されたものと確定できる⁵¹⁾。

以上見てきたところをまとめるならば、松葉軒版の版本は、享保期に開版されて以降、約150年間にわたって多くの書肆の手を経由しつつ、時代や社会の需要に応じて繰り返し本書の刊本を生み出し続けた、ということである。その版本は西川正休や松葉軒といった刊行当事者の手を離れたあと、近世日本の出版界で自立的に流通するようになり、明治まで生き抜いたのだった。

また煩瑣に過ぎるため表2には盛り込まなかったが、各群に含めた刊本の1つ1つにも細かな違いがある。それらはたとえば、表紙の種類の違い（色、模様、厚み等）や、見返しに捺された魁星印・書肆印の違い、また序・跋の挿入箇所、などである。そうした細かな違いまで見ると、松葉軒版の刊本は、1本として同じものはない、と言えるほど多様性に富んでいる。これは江戸期の刊本が基本的にすべて手作りであった以上、当然のこととも言えるが、同じ書肆が1回の増刷・製本時にそうした要素の1つ1つをわざわざ変えたとは考えにくく、本書が繰り返し増刷されたことの証左とも言える。江戸時代に成立した和刻の中国天文書で、本書ほど繰り返し増刷され、広く流布したものはおそらく他にないだろう。これまで同書の影響について語られるとき、その注釈書やそれを利用した書物の成立数の多さが引き合いに出されることが多かったが、そうした活動のすべてを支えていたのが、この和刻本テキストの度重なる増刷であったことは見逃すことができない。

4. 結論

最後に本稿における考察を、『天経或問』のもっとも完全かつ信頼のおけるテキストを復元するためには、どの刊本・写本を用いればよいのか、という観点からまとめるならば、以下ようになる。

第一に大集堂版（内閣本）は、巻頭・巻末の数葉と図版の一部に大きな欠損があるものの、現在知られる唯一の清刊本としてその重要性はゆるぎ得ず、本書にまつわるすべての研究の基礎史料とすべきものである。

他方、中国で成立した写本の中で、とくに[01]科学史所本は、「もう1つの清刊本」の内容を伝えることが確実視されるものだった。これと大集堂版との異同を明らかにすることは、本書のテキストの原型を確認するために欠かせない作業である。その意味において、『中国科学技術典籍通彙』が科学史所本の影印を広く公開したことの意義は大きい。

しかし忘れてはならないのは、日本において成立した写本の重要性である。とくに[05]平山本は、大集堂版系の清刊本をその字体にいたるまで忠実に模写した刊写本であり、大集堂版に見られる大小さまざまな本文の欠を補う上で、不可欠な存在である。さらに[06]～[09]の写本に挿入された印刷図版15丁は、大集堂版系の図版の覆刻版とみなされるから、その図版の欠を補う上で、期待しうる最大の正確さが保証されたテキストと言っても過言ではない。

また多数の刊本が現存する和刻本の存在も見逃すことができない。和刻本テキストに、大集堂版では原欠の張昌亮序が含まれることは、入江脩敬の証言を俟つまでもなく、「もう1つの清刊本」が日本に到達していたことを裏付けている。少なくとも張昌亮序の復元には、この和刻本テキストとの対校が不可欠である。さらに本文についても、入江はかつて和刻本を清刊本2種と比較して、「大同小異」としながらも、「而も二刊に出入す」としていた。これを上述の諸本の校合に加えることは、2種の清刊本の異同や距離を明らかにするうえでも重要な意味を持つだろう。

およそ以上の諸本と方針に基づいた校合・校訂を行うことにより、現史料でもっとも完全な『天経或問』テキストが復元できると考える次第である。

ところでこのように多くの重要なテキストが日本に残されたことは、本書がとくに日本において広範囲な読者を獲得したことのあらわれにほかならない。その要因はいくつか挙げられようが、もっとも大きな要因は、本書が天文学を単なる計算の道具ではなく、朱子学的な「然る所以の理」、すなわち万物万象の根本にいたるための学問と明確に位置付けたことにあり、また実際その試みが一定程度成功していたからだろう。『四庫提要』がその点を高く評価したことはすでに見たが、本書に序文を寄せた張自烈も、游藝を「実に理性の士」で、「僅かに天学を知り、測驗をよくするものには非ず」（序4b）とし、また同じく張昌亮も「天人合一の撰」（序1b）をなすものと称賛していた⁵²⁾。そして入江脩敬が游藝を「形シテ下ナル器」のみならず「然ル所以ノ道」を修めたと述べるように⁵³⁾、その評価は日本の知識人にも確かに受け継がれていたのである。

天文学を、単に「現象を救う」ためのものではなく、またその中西の別をことさらに問うのでもなく、むしろ古今東西の天文学説を「然る所以の理」の探求のもとに統合的に捉えるこうした知的態度は、朱子学的な気自然哲学の深い影響下にあった近世日本の知識人に強くアピールしたに違いない。またそれは、南蛮・紅毛の学術すら聖学の一部として探求しうる、あるいは探求してよいのだという認識への契機を内包するものでもあった。本書に限られた学者サークルのみならず、より広い出版文化のなかで自立的な地位を確立し、多くの読者を獲得し得た最大の理由は、この点にあったと思われる。

謝辞：『天経或問』研究会」参加の諸氏は、本稿の内容にかかわる多くの議論をしてくださり、とくに宮島一彦氏、嘉数次人氏には貴重な資料を提供して頂いた。孫承晟氏、山田俊氏、林宗台氏には、中国、韓国における資料調査にご協力頂いた。また宮島一彦氏、吉田忠氏、および匿名査読者の方からは、本論文の初稿に対して多くの有益なご指摘を頂いた。記して深謝申し上げたい。なお本研究は科研費研究課題17H02392、17K01179、18H00641の助成を受けたものである。

< 附録 >

表2に掲げた『天経或問』和刻本67点の巻構成、所蔵先、請求番号一覧。

【A群（8点）】

1. 林集A本（天・地2巻、東北大学附属図書館林集書、1624）
2. 都立A本（全4巻、東京都立図書館、特7325）

3. 秋岡 A 本（全 4 巻、神戸市立博物館秋岡コレクション、天文暦学 37）
4. 上海本（序図・地 2 巻、中国・上海図書館、線普長 024944）
5. 大阪科博本（全 4 巻、大阪市立科学博物館、2011-29）
6. 長崎 A 本（序図・天・地 3 巻 [合 1 冊]、長崎歴史文化博物館、15_94_1）
7. 京大 A 本（序図・天・地 3 巻、京都大学附属図書館、10-01_イ 3_16）
8. 学士院 A 本（天・地 2 巻、日本学士院、8544）

【B 群（13 点）】

1. 音無本（序図・天・地 3 巻、九州大学附属図書館音無文庫、802-テ-6）
2. 学士院 B 本（序図・天 2 巻、日本学士院、6380）
3. 天文台 A 本（全 4 巻、国立天文台三鷹図書館、348・307）
4. 桑木 A 本（全 4 巻、九州大学附属図書館桑木文庫、10 および 24）
5. 峰 A 本（全 4 巻、長崎歴史文化博物館峰文庫、440-4）
6. 長崎 B 本（序図・天・地 3 巻 [合 1 冊]、長崎歴史文化博物館、15_94_2）
7. 天文台 F 本（全 4 巻、国立天文台三鷹図書館、広瀬 29）
8. 碩水 A 本（序図・天・地 3 巻、九州大学附属図書館碩水文庫、テ 9）
9. 中国国図本（全 4 巻、中国・国家図書館古籍館、科 200-823）
10. 都立 B 本（序図・天・地 3 巻、東京都立図書館、和 230）
11. 羽間 A 本（序図・天・地 3 巻、大阪歴史博物館羽間文庫、101-31）
12. 学士院 C 本（全 4 巻、日本学士院、6878・6837）
13. 羽賀本（序図・天・地 3 巻、東北大学附属図書館羽賀文庫、MB25_015）

【C 群（20 点）】

1. 龍谷 A 本（全 4 巻、龍谷大学大宮図書館、640-3-w）
2. 龍谷 B 本（序図・天・地 3 巻、龍谷大学大宮図書館、640-6-w）
3. 林集 B 本（序図・天・地 3 巻、東北大学附属図書館林集書、760）
4. 桑木 B 本（序図・天・地 3 巻、九州大学附属図書館桑木文庫、11）
5. 国会 A 本（序図・天・地 3 巻、国会図書館、859-63）
6. 林 A 本（大略 1 巻 [序図・天・地 3 巻は別群のため略す]、東北大学附属図書館林文庫、691）
7. 桑木 D 本（大略 1 巻、九州大学附属図書館桑木文庫、22）
8. 長崎 C 本（全 4 巻 [合 2 冊]、長崎歴史文化博物館福田文庫、15_11）
9. 平岡 H 本（大略 1 巻、著者蔵）
10. 狩野 A 本（全 4 巻、東北大学附属図書館狩野文庫、8_31830）
11. 林 B 本（全 4 巻、東北大学附属図書館林文庫、692）
12. 狩野 B 本（全 4 巻、東北大学附属図書館狩野文庫、8_21380）
13. 天文台 B 本（全 4 巻、国立天文台三鷹図書館、349・308）
14. 桑木 C 本（序図・天・地 3 巻、九州大学附属図書館桑木文庫、12）
15. 龍谷 C 本（序図・天・地 3 巻、龍谷大学大宮図書館、640-15-2）
16. 平岡 C 本（序図・天・地 3 巻、著者蔵）
17. 京大文 A 本（序図・天・地 3 巻、京都大学大学院文学研究科図書館、K6-22）
18. ソウル本（序図・天・地 3 巻、韓国・国立中央図書館、古 7-20-40）
19. 平山本（天・地 2 巻、東北大学附属図書館平山文庫、MA401）

20. 国会 B 本 (大略 1 卷、国会図書館、118-69)

【D 群 (21 点)】

1. 桑木 E 本 (全 4 卷、九州大学附属図書館桑木文庫、9 および 25)
2. 京大文 B 本 (全 4 卷、京都大学大学院文学研究科図書館、K6-2, 3, 4)
3. 峰 B 本 (序図・天・地 3 卷、長崎歴史文化博物館峰文庫、440-8)
4. 平岡 G 本 (全 4 卷、著者蔵)
5. 宮島本 (序図・天・地 3 卷、個人蔵)
6. 室賀本 (序図・天・地 3 卷、京都大学附属図書館室賀文庫、MB_21_ 和 5)
7. 新城 A 本 (大略 1 卷、国会図書館新城文庫、特 2-91)
8. 龍谷 D 本 (全 4 卷、龍谷大学大宮図書館、640-2-w)
9. 渡辺本 (全 4 卷、国会図書館渡辺文庫、VF7-N55)
10. 天文台 D 本 (序図・天・地 3 卷、国立天文台三鷹図書館、351)
11. 宮内庁本 (全 4 卷、宮内庁書陵部、205-121)
12. 嘉数本 (序図・天・地 3 卷、個人蔵)
13. 長崎 D 本 (全 4 卷、長崎歴史文化博物館、15_695)
14. 中之島本 (全 4 卷、大阪府立中之島図書館、641-30)
15. 平岡 I 本 (大略 1 卷、著者蔵)
16. 平岡 B 本 (全 4 卷、著者蔵)
17. 天文台 C 本 (全 4 卷、国立天文台三鷹図書館、350・309)
18. 学士院 D 本 (全 4 卷、日本学士院、6879・6838)
19. 林集 C 本 (序図・地・大略 3 卷、東北大学附属図書館林集書、579)
20. 羽間 B 本 (大略 1 卷、大阪歴史博物館羽間文庫、101-33)
21. 天文台 E 本 (大略 1 卷、国立天文台三鷹図書館、310)

【E 群 (2 点)】

1. 平岡 A 本 (天・地・大略 3 卷、著者蔵)
2. 桑木 F 本 (大略 1 卷、九州大学附属図書館桑木文庫、23)

【F 群 (1 点)】

1. 平岡 E 本 (大略 1 卷、著者蔵)

【G 群 (1 点)】

1. 林 C 本 (全 4 卷、東北大学附属図書館林文庫、693)

【H 群 (1 点)】

1. 秋岡 B 本 (全 4 卷、神戸市立博物館秋岡コレクション、天文暦学 38)

文献と注

- 1) 本書にまつわる代表的な研究に以下のものがある。吉田忠「『天経或問』の受容」、『科学史研究』第 II 期 24 卷 (通巻 156 号)、1986 年、215-224 頁。渡辺敏夫『近世日本天文学史』上巻、恒星社厚生閣、1986 年、37-44 頁。張永堂『明

- 末清初理学と科学関係再論』台北：台湾学生書局、1994年、49-103頁。馮錦榮「游藝及其《天経或問》前后集」、王渝生主編『第七届國際中国科学史會議文集』鄭州：大象出版社、1996年、286-300頁。山田慶兒「中国の「洋学」と日本」、『洋学：洋学史学会研究年報』第6号、1997年、1-9頁。久米裕子「日本における『天経或問』の受容(1)―その書誌学的考察」、『京都産業大学日本文化研究所』第9号、2004年、102-146頁。MOON Joong-Yang, "Late Circulation of the Early Qing Natural Studies in 19th Century Korea", *Historia Scientiarum*, vol. 17, no. 3, 2008, pp. 189-210. なお中国では本書を「天経或問前集」と呼ぶことが通例化しているが、本稿で詳しく見るように、清刊本をはじめとする本書の一次史料に「前集」の字は見えず、「天経或問」と題するのみである。「前集」という呼称は、すくなくとも四庫全書編纂時までさかのぼるもので（『四庫全書総目提要』巻106）、続編にあたる游藝著『天経或問後集』と区別する上で便利なものではあるが、書名として採択するには上述のような文献学的問題があることを明記しておく。
- 2) 以下の伝記的情報と『天経或問』の概要については、とくに次の研究に依拠したことを明記しておく。吉田(1985)。馮(1996)、286-300頁。馮錦榮「天経或問提要」、薄樹人主編『中国科学技術典籍通彙』天文巻・巻六（鄭州：河南教育出版社、[1996年]）、153-156頁（以下『通彙』と略称する）。
 - 3) 方以智と熊明遇にまつわる近年の研究（とくに科学関係）として以下のものをあげておく。尚智叢『明末清初（1582-1687）的格物窮理之学：中国科学發展的前近代形態』四川教育出版社、2003年。熊明遇著、徐光台編注『函字通校釈：格致草（附則草）』上海交通大学出版社、2014年。
 - 4) 本稿で『天経或問』のテキストを示すとき、とくに明記しない場合、西川正休による和刻本（松葉軒版の都立A本）を用いた。引用にあたっては、原則として西川の訓点にしたがって原漢文を訓読したが、適宜改めた部分もある。なお訓読および本文の検討にあたっては、以下の注釈書・校訂本から学ぶところが多かった。西村遠里編『天経或問註解』（国立公文書館内閣文庫蔵本。請求番号197-213）。渋川佑賢編『校正天経或問』および『天経或問国字解』（東北大学附属図書館林文庫。請求番号2773・2774）。
 - 5) 掲暄と『写天新語（璇璣遺述）』については、孫承晟「掲暄《璇璣遺述》成書及流伝考略」、『自然科学史研究（中国科学院自然科学史研究所）』第28巻、第2期、2009年、214-226頁参照。
 - 6) 以下の概説は、吉田（1985）、217-219頁に多く依拠している。
 - 7) 吉田（1985）、222頁。
 - 8) 『朱子語類』巻98、張子之書一「蓋天在四畔、地居其中、減得一尺地、遂有一尺氣、但人不見耳。掲暄『璇璣遺述』巻1、天氣内実「朱子云、地之四畔、皆天。減一尺地、便多一尺氣。多一尺氣、不多一尺天乎。況地為天心、亦氣所結、則地亦天也」、『通彙』、300頁。
 - 9) この文は游藝の発言の体をとるが、実は熊明遇『格致草』大象恒論の章句を利用している。「天包着他、元氣晝夜運行、四面都是上、無可墜処、又在天之至中、亦無可倚処」。前掲熊明遇・徐光台（2014）、425頁。
 - 10) 前掲注8および9参照。
 - 11) 『天経或問』や『格致草』におけるアリストテレス自然学の中国化については、山田（1997）を参照。
 - 12) たとえば日本学士院編『明治前日本天文学史・新訂版』野間科学医学研究資料館、1979年、151頁。
 - 13) 梅文鼎撰・梅穀成梓『績学堂詩鈔』巻2、13b。これは「寄方位白五首」の一首で、方位白は、方以智の子・方中通（1634-1698）である。
 - 14) 封面「方密之先生鑒定／閩中游子六輯著／天経或問／書林大集堂梓」。なお中国・国家図書館が所蔵する『天経或問後集』不分巻4冊（マイクロ番号A02705）も、同じく大集堂からの刊行である（封面「兩浙李撫院発刊／天経或問後集／書林大集堂蔵板」）。同書の影印本は『通彙』、220-274頁に収録されるが、この封面は未収録。この本は原本の間覧が許されず、匡郭等の寸法をなお比較できないが、版面や字体の特徴は大集堂版に酷似することを明記しておく。大集堂については、邢益海「方以智『葯地炮庄』版本考」、『中国哲学史：季刊』2012年第1期、106-112頁、とくに109頁、注1を参照。
 - 15) 馮（1996）、289-290頁、および久米（2004）、110-111頁も参照のこと。
 - 16) 久米（2004）、111頁。
 - 17) 馮（1996）、290-291頁。
 - 18) 科学史所本は、その影印本が『通彙』、157-219頁に収録されるが、この封面は未収録である。
 - 19) 大集堂版がこの序を欠くのが、後代の欠損等ではなく、原欠であることは、すでに久米が指摘している。久米（2004）、140頁、注16参照。

- 20) 入江脩敬『天経或問註解』序巻、凡例。本稿では筆者蔵本を用いた。
- 21) 久米 (2004)、109 頁。なお「郡上侯」は美濃郡上藩主・金森頼錦 (1713-1763) のことか。
- 22) 渡辺 (1986)、39 頁参照。また長崎聖堂と現存する関連史料については、熊本県立大学平岡研究室制作『ウェブ展示 長崎聖堂の世界 ver. 1.0』、2016 年、<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~hiraokar/seido.html> 参照。
- 23) 平岡隆二「小林謙貞伝—長崎の史料を中心に」『長崎学：長崎市長崎学研究所紀要』第 2 号、2018 年、20-21 頁。また謙貞を中心とする長崎派と西川如見については、平岡隆二「アリストテレスを運氣論で読み解く—『南蛮運氣論』と 17 世紀長崎における西学理解—」、武田時昌・麥文彪編『天と地の科学—東と西の出会い』京大文学部人文科学研究所、2019 年、1-12 頁参照。なお長崎派の系譜に連なる盧草拙 (1675-1729) も『天経或問』を高く評価していた。平岡隆二・日比佳代子「史料紹介 細井広沢編『測量秘言』」『科学史研究』第 43 巻、No. 230、2004 年、96 頁。平岡隆二「『測量秘言』の写本について」『長崎歴史文化博物館研究紀要』第 6 号、2012 年、53 頁。『盧氏文書』(九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門古賀文庫 37・38) 下巻、40 才、52 才、53 才参照。
- 24) 九州史料刊行会編『益軒資料二：延宝七年日記・日記五号・日記六号・玩古目録』(九州史料叢書 7) 九州史料刊行会、1956 年、17 頁。
- 25) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所、1967 年、36 頁。『天経或問後集』については、中山茂「『天経或問後集』について」、蕨内清先生頌寿記念論文集出版委員会編『東洋の科学と技術：蕨内清先生頌寿記念論文集』同朋舎出版、1982 年、199-208 頁。馮 (1996)、291-294 頁。孫承晟『観念的交織—明清之際西方自然哲学在中国的伝播』広州：広東人民出版社、2018 年、193-200 頁参照。
- 26) この写本については児玉明人「天経或問の写本」、『古書通信』第 31 巻第 1 号 (通巻 438 号・復刊第 261 号)、1966 年、11 頁。藤原暹『江戸時代における「科学的自然観」の研究』富士短期大学出版部、1966 年、25 頁参照。
- 27) たとえば [03] 静嘉本の図版のうち、星図 5 図は輪郭しか描かれず、細部はほとんど空白のまま残されている。このように図を写さず空白として残す例は、中国・日本の近世写本で枚挙に暇がない。
- 28) 大庭 (1967)、36 頁。
- 29) 橋口侯之介『江戸の本屋と本づくり：続・和本入門』平凡社、2011 年、183-218 頁。
- 30) 橋口 (2011)、205-210 頁。
- 31) 森潤三郎著・朝倉治彦解説『考証学論攷—江戸の古書と蔵書家の調査』日本書誌学体系 9、青裳堂書店、1979 年、242 頁。林が古義堂と深い関係にあったことについては、中嶋隆「林文会堂義端年譜稿 (上) —元禄末年まで—」、『国文学研究 (早稲田大学国文学会)』第 85 号、1985 年、38-47 頁参照。
- 32) 沼田については佐藤賢一「真田宝物館所蔵の測量術書について」、『松代』第 18 号、2004 年、1-11 頁、および同『近世日本数学史：関孝和の実像を求めて』東京大学出版会、2005 年、218-225 頁参照。この 2 種の識語は、沼田の事蹟について数多くの新事実が判明する有益な新史料である。
- 33) 原漢文に付した豎点は「もり・げんせんし」と読ませるため、姓に「森」字を含む人だったと考えられるが、詳細は不明である。
- 34) 長澤規矩也『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』汲古書院、2006 年 [初版 1976 年]、117 頁。久米 (2004)、114 頁。
- 35) 表 2 にまとめた諸本の巻構成・所蔵先・請求番号については、本論文の附録を参照。
- 36) 中野三敏『書誌学談義 江戸の板本』岩波書店、1995 年、215-217 頁。
- 37) 同上、272-276 頁。
- 38) 以下の版元に関する情報は、とくに明記しない場合、おおむね次の研究に拠った。矢島玄亮『徳川時代出版者・出版物集覧』萬葉堂書店、1976 年。井上隆明『改訂増補 近世書林板元總覧』青裳堂書店、1998 年。
- 39) 以下の諸本に付される奥付に「于時／寛延三年庚午冬蜡月／筑南久留米学官／入江平馬編述／東都書肆 若菜屋小兵衛梓行」と見える。東北大学附属図書館藤原集書 279；同平山文庫 MA408；同林集書 22。また朝倉治彦・大和博幸編『享保以後江戸出版書目 - 新訂版 - 』臨川書店、1993 年、70 頁も参照。
- 40) 前掲の東北大藤原集書 279；同平山文庫 MA408；同林集書 22 の巻末を参照。
- 41) 日本学士院が架蔵する写本『古天文学家伝』(請求番号 5856) がこれにあたると思われるが刊行された形跡はない。また西村遠里は後に『天経或問』本論の註解本『天経或問註解』(明和 8・1771 年序) を完成させたが、これも刊行されず、写本の形で現存する。
- 42) 東北大学附属図書館狩野文庫 8_21382 の奥付参照。なおこの群には、別版の嵩山房奥付 (広告を含む) を付すものも含めた。該当本は長崎 C 本、平岡 H 本の 2 点で、文言は「華本 清人不知足齋叢書／翻刻 春臺先生音孔

- 傳古文孝経／〔広告略〕／江戸 書肆嵩山房 小林新兵衛梓行〕。
- 43) 朝倉・大和編前掲書、226 頁。
- 44) 大阪府立中之島図書館編『板木総目録株帳一：大坂本屋仲間記録第十二巻』清文堂出版、1988 年、133 頁。山口・泉本連名の奥付を有する入江註解の刊本には、東北大学附属図書館平山文庫 MA396 がある。
- 45) 前掲『板木総目録株帳一』、133 頁。
- 46) ただし、『板木総目録株帳二』（文化九年改正）は、「天経或問 四」および「同 注解 三」の版株を、「相 河太・河八」の相合株としている。大阪府立中之島図書館編『板木総目録株帳二：大坂本屋仲間記録第十三巻』清文堂出版、1987 年、263 頁。この文化九年改正版に山口の名が見いだされないこと理由はなお不明で、後考を俟ちたい。なお D 群の刊本の一部（宮内序本、平岡 B 本、学士院 D 本、林集 C 本、羽間 B 本）に、文金堂河内屋太助の広告が付されることも、この問題と関係するかもしれない。
- 47) 前掲『板木総目録株帳一』、133 頁、および前掲『板木総目録株帳二』、263 頁。
- 48) 橋口（2011）、175 頁。
- 49) 奥付の全文は以下のとおり。〔〔上段〕 三都／発行／書肆／〔中段〕 江戸日本橋南壺丁目 須原屋茂兵衛／同浅草茅町二丁目 同伊八／同日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛／同中橋廣小路 西宮弥兵衛／同芝神明前 岡田屋嘉七／同下谷池之端仲町 岡村庄助／尾州名古屋本町通 永楽屋東四郎／同本石町十軒店 英屋大助／京都三條通御幸町角 吉野屋仁兵衛／尾州名古屋本町通 菱屋藤兵衛／大阪心齋橋通唐物町南へ入 河内屋太助／同 同所河内屋仁助／〔下段。河内屋太助・河内屋仁助の下にそれぞれ〕 板／行〕。
- 50) 橋口（2011）、181 頁参照。
- 51) 奥付の全文は以下のとおり。〔〔上段〕 発行／書肆／〔中段〕 京都三条通御幸町 吉野家仁兵衛／東京日本橋通南壺丁目 須原屋茂兵衛／同 通二丁目 山城屋佐兵衛／同 同所 須原屋新兵衛／同 芝神明前 岡田屋嘉七／同 同所 和泉屋吉兵衛／同 両国横山町三丁目 和泉屋金右衛門／同 下谷池之端仲町 岡村庄助／尾州名古屋本町通 永楽屋東四郎／同 同所 万屋東平／同 同所 菱屋藤兵衛／同 同所 菱屋平兵衛／大阪心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛／〔下段。河内屋喜兵衛の下に〕 板〕。
- 52) 吉田（1986）、217 頁。
- 53) 前掲『天経或問註解』序巻、26a-b。

Printed Editions and Manuscripts of *Tianjing huowen*

Ryuji HIRAOKA

The *Tianjing huowen* 天經或問 of You Yi 游藝 (fl. 17C.) is a book on natural philosophy, composed under strong influence from the scholarly circle led by Fang Yizhi 方以智 (1611-1671) in the Jiangnan region. Although this book is known to have been more widely distributed in Japan than in China, no extensive survey of its textual exemplars has so far been carried out. Based on a survey of existing printed editions and manuscripts of the book, this paper seeks 1) to specify the most important exemplars useful for restoring the text of the book, and 2) to clarify the aspects of this book's textual production and circulation, especially in Japan, where the majority of surviving exemplars are found.